

日本近代文学会関西支部編集委員会 編

## 『異なる関西』

山崎義光

の三篇とコラム  
では、関西沖繩  
県人会機関誌  
『同胞』の意義、  
熊野新宮の人脈  
と文化的動向、  
川崎三菱労働争

本書は二〇一五〜一七七年にかけて日本近代文学会関西支部で企画された特集の成果論集である。「関西」という呼称は二〇世紀になって一般に定着したもので、まえがきによれば「異なる関西」とは「既成の「関西」表象を差異化し、更新しようとする試みだった」という。各論は、「関西」という括弧に一元化し得ない歴史的、社会的な諸相にこそ着眼し、一九二〇〜三〇年代を中心とした表象をとりあげて多元的多様に論じた。「第一章 移動と差異化」の四篇とコラムは、藤島雄三の映画における大阪表象、直木三十五の五代友厚表象、金達寿の渡来人史観と「行基の時代」、黒川創氏の小説『京都』の執筆背景、坂口安吾の京都表象をとりあげた。「第二章 場と営み」

議にかかわる労働者たちの文化運動、奈良の表象をとりあげた。「第三章 メディアと文化環境」の三篇とコラムでは、『大阪朝日新聞神戸附録』を起点にメディアと読者との関係に着眼し一九二〇年代の神戸の芸術文化活動の人脈、新聞連載小説と映画化の連動、前衛と郷土との接続、写真家北尾鎌之助をとりあげた。「第四章 散種されるモダニズム」の三篇とコラムは、阪神間モダニズム期の神戸を表象した稲垣足穂、横溝正史の小説、神戸における文学と人的交流をとりあげた。各論者たちのこれまでの業績を土台としたポリフォニックな文化史的研究論集というべき構成である。  
一九二〇世紀前半、船や鉄道による国内外の交通網の形成が人・物の移動を活発

化し都市を形成した。殖産興業により大阪や神戸に工場が乱立。大阪は水都から煙都に変容し郊外都市の形成を促した。神戸には工場と労働者の町ができる一方で、外国人居留地、海外航路の拠点となり欧米文化を受容した。それゆえ労働運動が起った一方、前衛芸術が地域文化活動と結びついた。京都では新旧の社会層が混在し各所に分節線の走る社会相をなした。各論では、こうした各所の歴史的な断層・社会的な断相がどのように混成していたか、また断層断相のキワで新たな文化がどう形成され表象されたか、文学にはそうした相貌がいかに言葉で織りこまれたか、そして無名の人びとが書く行為を通じてどのような紐帯を生み出したか等々が論じられた。もはや一〇〇年前にならんとする二〇世紀前半の「関西」各所における多様な表象行為を中心に、都市・交通・メディアを地盤とした、表象をめぐる文化的諸相を考究した近代文化史研究の論集である。

(二〇一八年一月五日 田畑書店 三二六頁 二八〇〇円+税)